

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-6

2人はデザートに塩黒豆ロールケーキを抹茶で味わった。

下膳の依頼電話をかけ終わった麻里子は、

「これからお風呂をいただきます」と面映ゆい表情を浮かべて言った。

「私はバーに行っているのです、ゆっくり入るといい」と辰巳は言って、気遣いを見せた。

基本的なことは同じ……時が過ぎても

そして恋人たちが愛し合えば、今でも

「愛している」という……

豊年虫8室の中で桔梗が一番、こじんまりしているが、部屋風呂のゆったりとした広さとガラス窓越しにライトアップされた坪庭の風情を味わうことができた。

石造りの浴槽に入りながら、麻里子はひとりになってしまうと、（ここはどこ？私はだれ？）と自然に自問していた。

気は張りつめていても、どこか夢遊状態にあった。

初めて会った男と5時間ばかりしか過ぎていないのに、今起こっている出来事が本当かどうかともわからなくなってきていた。

坪庭からコオロギの鳴き声が聞こえて、幻想かもしれないと思うと、そんな気もしたけれど、ディテールが明瞭すぎて、現実逃避は叶わなかった。

手早く髪と体を洗い終えた麻里子は、40半ばにしては若々しい肉体を湯船に沈めた。

髪を乾かし薄化粧をして風呂場を出ると、片付いたテーブルの先の部屋に並べて敷いてある布団が見えて、麻里子はドキッとした。

浴衣の上に半纏を羽織った辰巳は、カウンターバーにいる中年のバーテンダーに、この格好で飲んでいいかを訊いてから椅子に座って、カクテルのロブ・ロイをオン・ザ・ロックで注文した。

バー空間の佇まいやバーテンダーのステアさばきに、勝手にこのホテルの格付けをAランクに独り決めした辰巳は、カクテルをひと口飲んでほくそ笑むと、ロブ・ロイのカクテル言葉（あなたの心を奪いたい）を訊いてみたい衝動に駆られたが、思いとどまった。

「ところで、シャトー・ディケムは置いてあるかな」と辰巳はここに来た本来の目的をバーテンダーに期待を込めて訊いた。

「何とかなるかもしれませんが、少しお待ちいただけますか」とバーテンダーは即答して、電話で用向きを誰かに伝えてから、「近くにワインエキスパートの資格を持っている店主がやっている酒屋がありますので、コンシェルジュに訊いてもらっています」と蝶ネクタイを触りながら言った。

間もなくグレイヘアの女性がやって来て、

「ご所望のワインは仕入れ先の酒屋にございましたので、届けさせられますが……」と高価のせいで言いよんだ。